



國家圖書館編

東亞同文書院 中國調查手稿叢刊

4



六月三日

六月四日

國家圖書館出版社



國家出版基金項目
NATIONAL PUBLICATION FOUNDATION

國家圖書館
編

東亞同文書院
中國調查手稿叢刊

4

國家圖書館出版社

第四冊目錄

昭和二年（一九二七）旅行日誌（第二十四期生）

千賀安太郎	第六卷第三編		一
湯口重壽	第六卷第四編		八三
宮崎武雄	第六卷第五編		一一九
中村加治馬	第七卷第一編		二〇三
岡部俊雄	第七卷第二編		二五三
中島監	第七卷第三編		三〇三
大脇浩六郎	第八卷第一編		三四一
佐佐木安明	第八卷第二編		四〇一

昭和二年

北支北滿經濟調查班
旅行日誌

第卅期生

千賀安太郎

第六卷 調査旅行日誌

三

五月一日 曇。 出發。

五月一日 曇。 出發。
電車の煙の大半は行に立つのは来た。さう出たところ、
煙の多い、さうと準備もなつた頃は煙の多い、細雨も止み、
行はつた。前に班員一同記念撮影をとり、諸先生
並みに学友に水をぬき、暫中の別れをとり、爆竹の音もあ
しく拍手の中に電車は去る。満鐵碼頭、其処には
満つた朝の煙氣も肌寒く覺えた。満鐵碼頭、其処には
我々の来りんとす。大連丸が待機する。満鐵碼頭、
いよいよ水もさうだ、出帆の時刻九時迄には未だ相当
時が過ぎた。此方、大連丸の旅行班、其班、即ち三十名余り一
舟に本日大連丸の乗客も、さうなり、大連丸と
ハツクに各組を水に、乗客を乗る。銅鑼は鳴る。大
帆の合図だ。副班長、大船、高橋先生並に学友に見

乙

送らる船は請かに碼頭と離れ出した。碼頭に見送る人の影も尖て老上堀と後に遠ざかる。折から夏國航座母艦より飛んだ飛行機はあたかも我々の出度と見送るかの如しに思われた。解纜後門も多く再び油角が降り出した。船内は通風悪く甚く上乗客頭より下へ狭い席に各自話めに二十名も押し込まれる。船にはおろそかの元でもなりが手付けをした。一時間から少しし船は揺れ出した。船内には露人夫婦と子供が居る。居るを以て日本艦、お節艦の如きことを語る。その面白く感ぜられた。昨春飛行機を乗った。強んど眠るなかつた。今夜はと構ひに成れば、四下からの大いなる足攻めが此れも眠る。ない。斯くして、飛行機の第一日も暮れんとす。

六月二日

晴

青島着

寿司詰武に団体席に押込められ面からも自分の周囲の者は何
 れも寝相の悪い連中ばかりと少し怪しんで寝就いたと思ふ頃には
 彼方此方から大の足を見舞われと云ふ始末だつたを遂に朝の四
 時頃には甲板にまで出て見たが其の當時は水の色も未だ雨後の
 川のやうに黄色を呈してゐた次第に青包に乗り船長と小島だに
 見えない青海の真只中を走つて進み馳つて十時半頃より右舷に島
 り島らしいものが見え始めた。

上海から青島迄は数班一組と船中退屈と云ふた称な成りぬの起
 こせられなかったことは幸也だつた。十二時過ぎたところへ下船の準備
 に取り掛る。一時半頃には鏡のやうに極めて静かな青島港内へ流
 るか如くに船は徐行す。正面に當つて見えるのか音に聞えたのか水
 浴場だと云ふ。独逸の全盛時代に外観よりと体裁のよいまゝをな

ければ建築も容易に許さなかつたと云ふ程外觀に重きを重しつて造
 られたものだから、彼の緑の山を背に、いじんまりした西洋造りの建物
 等々に感ぜがよい。青島は一つに見ると別荘地の感も深からうめた。
 塵埃多き且つ平坦で起伏の少い土地に住み慣れた我々の前には青
 島といふ高い所に感ぜのよい建物と眺めた時は日本にもあつたやうな気
 かゝるところとも支那の顔土内では思はれない。

船中の日本人より、ある山東砲台、その砲臺の跡々と指し教へられる。檢閲
 が終ると再び船は廻る處と本營の棧橋に横付けになる。それ迄は小一時
 はかゝる。米國の潜航艇六杯、日本は其の奥に二杯横つてゐる。

上陸したのは三時頃だったが、まだ陽明山の軍旗色更く、舟めに大砲の船
 舟より小艇する時身兵隊の碼頭にあらゝる、敵軍の警戒が厳しうた。僕等
 にも後進と強へられた。松茂里旅館に到着した。先ず第一に日本人
 な伊東隆真氏と訪問。東客の舟め挨拶だけにして帰る。

丁度今日は日本の陸軍が上陸したのを市井はそれとなく騒いだ。
 青島は日本人約一万三千人、支那人を併せて十万人と云ふ。此の地の邦人
 商人は経済戦に於て支那人により駆逐され、侵略される。あ
 りそのため邦人人口は毎年減少してゐる。有様である。軍政の布
 かれてゐた當時に遼東を立派な道路、一旦支那側の手に渡され、か
 らと云ふものは強いて修繕せねばならぬ荒廢に委ねられてゐる。此の地は
 5.

六月三日

晴

青島滞在。

班員一同白須賀洋行に赴き支那人村に種々調査話を
 した。十時より東洋一の屠牛場を見学す。これは資本
 金極四拾萬圓で日支合辦の會社だ。一日の屠殺能力は千
 頭で一年平均一萬頭の肉の日本に向け輸出される。と云ふこと
 だ。そして本年は八萬頭に達する見込の由。此の内部は屠殺

に従事する者は全部支那び何れも鮮血に染つたベルト／＼のズ
 ボンを着けて御座る。梅は死然地獄の情願だ。獣醫西の検査に
 合格した牛は眼隠もせられずに血臭い鮮血滴る屠殺場を引かれ行
 くが奴等達には煩る平氣で倒れぬ殺さるゝのほんやり見てゐる日本
 の牛は容易に屠牛場には入れられて倒れてゐたが此処の牛にはそれ
 だ。何分昨日の端午の節句の屠め牛より大部分の豚を殺す筈に
 なつてゐるとのことといふたがそれをも四、五百頭は新鮮でせう。豚の目見
 たらつたが彼の豚布を被せられ聲のあつたものゝ眉間にさへられ鎚で一撃
 度けと見ると早いかといふと倒れるとさういふやうな豚と切り血を流すと同
 時に尖鋭い刃で動さぬ心臓の力で自然に血は絞り出される
 其の固い早さといふたら素敵なものだ。斯うと判られた肉は更
 に検査の上で屠庫に送られる。一通り屠殺の現場及び設備を
 見物と終つたのは十一時過ぎたつた。

領事館と訪問先輩原警察署長に所會ひしようと思つたが
生憎所用の爲め外出されたとの話だつた。最近親う梅州迄
へ行つて来たとなふ部長から梅州事情に就き詳しい話を承つた。
伊東三と訪問一同代から梅州と青島との関係及梅州事情に關
する調査報告を戴きつゝつた。

此の日領事館に梅州行きは思ひ留まるやうに勸告をまはけた。此の
次孫傳芳等擁護會條約も殆ど悉く拒絶に應答した。正却も猶も一梅州に
は孫傳芳等兵が流れ込んできてゐるから危険だと言ふのとそれ程大
に計でもないがそれだ。梅州より更に西進出来るならば海は別だが
こゝ梅州より少し歩かぬと出来ないのだからそれ外へ行しやうにとの話に
惹きつけられ行きは断念した。

六月四日 曇 青島帰任

今朝はまた何日にもない深い霧だ。本日は亦平村さんの案内で市中

見物の勝地で馬車と駐つて青島神社に参拝す。此の日は青島
 女学校だ。此日は舞臺を招に能く駐ければアサシヤ舞臺一草気
 満の道下。能樹の蔭に中々少量の水は流れ風景殊の外良い。
 青島神社は實際気候がよい。原來青島は種々傷傷は好くても
 折日余り有たないかアサシヤは暑熱此の地にあると見え、非常
 に暑い。曲り廻るやと登りつた所は日独戦争を思ひ出す
 に十分なイルカス砲台である。砲は二文あるが中一文は丁度中央の鉄板
 を欠けた。良い砲に破他の一文は強いて全部破壊さるゝおる。常の目
 なう。此の所からは青島市街を見下すことゝある。わが生憎濃
 霧の所が見る。この山馬なかなのは残念だ。幽谷は旭公園に遊い
 悲魂碑に参拝し競馬場を招に相新にある山東砲台の見学
 に行かう。こゝに余中支那巡捕の所を阻害する。宿は一先づ泊る。
 暫くして商業會議所に行き先此車の停泊、牧野さんに行かへ

し離海鉄道の調査報告書と戴しと納る。

大時半から花山で青島同窓会支部の歓迎會に出席す。

青島新聞社長山谷氏の同席の饗に始まり大いに昔の青島

健児の意氣のあつた町と今此処に相見するを獨りとして共に近頃

の学生には老時の顔な意氣が失はれたと云ふこととさうなれば此

れには青島をさぐるを得ない。盛大の中に十一時に終つた。

斯くしての四日も暮れんとしぬる就寢す。付しきた。

六月五日

晴

青島出發

起床後早速出發の準備を済ました上影計一宿屋の二華山丸
出帆の時間と確かめたりした所午後一時出帆のこととて郊外の九
氷に自動車も走らず海中石造の家を大分見渡けた。何じも
此の地は石秋は頗る豊富なを昔い關係たと隣かされたか。物
に之為は眼に付いた。一時はかりにして目的地に到着す。時子

もたい二ととて直ぐ頂上の柳樹台に金と少々を見下すも其
 一備觀だ。頂上には西洋造りの茶屋があるが今は荒廢に陥し人も
 居ない。少憩の後物産に付き途中の茶屋でカイラーを求めて、
 喇叭飲みにして物産を買い、道路降雨は何時かおちるまいと思
 え自郵舟の面より過ぎた後は砂煙朦々として一足先きも見えな
 いと云ふ始末だ。途中時は有慶ら一驢馬に若奥杯を載せ
 その夫とも思はれる支那人が驢馬を引し行きのに出宿つた所
 驢馬が相手を此の地帯の交通の概圖とてこの後刻を語りける所
 に感ぜられた。支那に居る人にとりては水も火も此の地の人
 には与けられぬ此の位の見景の所は日本には到る所にある。宿に
 宿つて大急ぎで旅行荷物を纏めて宿を去り華山丸に乗船す。
 舟屋船長からは一方ならぬ便宜を蒙りて戴いたに付しは衷
 心から感謝す。船中で支那道を見つ現在東亞社々長である所

所の著述家内藤順太郎先生と心安しなり、天皇中心主義に
並ぶに、女性的支那觀に等し、就き先生一流の意見と承つた。
先生は二十年も支那に居られたりあり、支那と理解し、従つて書
院と云ふものに對しても相當の期待と持て居られると同時に一介若い青
年が非常すぎるゝい。

故國の如うな感のする青島も廢藩と残し、支那の如くといふ。

六月六日。

晴。

舟中。

昨程は船長の室で寝たのを機と迄寢るゝる譯には行かぬ、お蔭
でいこり気持よく眠られた。

三等の甲板は青島からの苦力の如く格好した、支那兵で満員
だ、彼等デッキ船客連、おれ、食料を携帯してあるのを、おれ、茶
と煙草だけだ。庚を云ふと僅身もデッキパツセンジャーの印符であら